弁護士ママがこれからの男の子たちへ伝えたいこと

～「男の子あるある」ってホント？「らしさ」を押しつけない子育てとは！？～

《日時》令和４年11月26日(土)

息子2人を育てている太田弁護士から、
「男の子だから」「女の子だから」にこだわらない子育てについてお話を伺いました。

《講師》弁護士
太田 啓子さん

≪プロフィール≫

日本弁護士連合会両性の平等に関する委員会委員、神奈川県男女共同参画審議会委員等経験。一般民事事件、家事事件(離婚等)を多く扱う。
著書には「これからの男の子たちへ「男らしさ」から自由になるためのレッスン」(大月書店)「憲法カフェへようこそ」(共著、かもがわ出版)「これでわかった！超訳特定秘密保護法」(共著、岩波書店)がある。二児の母。

太田弁護士の著書「これからの男の子たちへ」

扉絵のカット

コムズ２階図書コーナで
貸し出ししています！

イラスト・マシモユウ

太田弁護士初の単著。
性差別を無くすためには子ども時代からしっかりと教育をする必要があるのではないか・・・？
男の子たちは女性とは違う立場で性差別とぶつかるかもしれない・・・そんな時どうするのか。
２人の男の子を育てている太田弁護士ならではの、男の子たちにとって性差別や性暴力について考えるヒントになる、メディアでも多数紹介された話題の本です！
韓国・台湾で翻訳され、中国でも翻訳予定です。

講　　義　　内　　容

太田弁護士から、弁護士業務や子育て経験から感じた性差別構造について学びました。

日本社会の性差別構造にはどんなものがあるのか？

≪経済力の格差≫

専業主婦が減り、働く女性は増えたが、パート等の非正規雇用が多い。今回、コロナ禍で顕著になったが、非正規雇用で働く兼業主婦は「夫に養ってもらえるだろう」と思われて真っ先に解雇されやすい。

一方、正規雇用であれば男女格差がないのかというと、女性の方が賃金が低く、格差が存在する。

また、女性管理職は増えないどころか、政府目標の「2020年代の可能な限り早期に管理職などの女性の割合を30％にする」に対して「必ずしも達成が必要と考えていない」と回答した企業が今なお100社中６社もあった。

女性は経済的に男性に依存せざるを得ない社会構造がある。

≪家庭の役割分担の格差≫

世界的にも家事・育児などの無償労働を女性の方が負担している国が多いが、特に日本はその傾向が極端である。

男性の長時間労働が原因でもあるが、専業主婦世帯と共働き世帯では、女性の家事・育児の負担の割合はほとんど変わらず、どちらにせよ女性の負担が大きい。

さらに、コロナ禍で男性が家庭にいる時間が増えたことで男性の家事・育児参加が増えたが、女性も家事・育児の時間が増えたという事実が明らかになった。

≪国会議員の男女格差≫

日本は世界的にも女性議員が少ない。国を左右する政治的意思決定へ参画をする機会が少ないのは問題である。

日本でも少しずつ女性の政治参加が進んではいるが、スピードが遅いのが現状だ。

マジョリティの特権

経済面や家庭の役割分担面から見ても、性差別構造においては男性が女性より優位にある。

それによって、女性ならではの抑圧に男性は遭遇せずにすんでいることも事実である。

マジョリティにいる側はこれらのことに気づきにくいので、まずは自分がマジョリティ側であることを認識し、またその指摘に慣れることが必要である。

「男らしさ」が抱える問題

若い男性がグループで悪事を行う時の誘い文句として、「お前、男だろ」という言葉が使われることがある。「男らしさ」を日頃から無意識に強要され、生きづらさを感じている部分もあり、男性ならではの大変さもあるが、「男らしくある」ことが間違った方向へ向かってしまうことが時にはある。

しかし、「男らしい」ことはいけないことではない。問題なのは、「男の子らしさ」が有害に働いてしまうこと、そして、「男だからこうあらねばならない」という言葉と共に「女だったらそうでなくてもよいけれど」という裏メッセージが伝わってしまうことである。

子育てから感じるジェンダー問題

教育費に関して男の子に優先的にお金をかけて、女の子はその次というようなことは過去の話ではなく、現在も存在する。

また、「男子ってバカだよね」という言葉で行動が大目に見られたり、スカートめくりもあまり問題視されなかったりする。そのようなジェンダーバイアスは一体いつ生まれるのか。

「男の子らしさ」「女の子らしさ」などの、「らしさ」は大人の無意識の誘導によって定着していく。大人も無自覚に行っているので、私たちの暮らしの中にジェンダーバイアスが常に存在している。

性差別を無くすことの難しさ

受験に失敗した時、「女の子だから勉強できなくても大丈夫だよ」というような、心からの励ましの言葉をかけているつもりで、実は無意識に性差別をしている場合がある。言葉を発する側は、決してそのような意図はないにも関わらず・・・。

このように、「愛情」と「性差別」は両立するので、自ら気付くのは簡単ではない。

しかし、それは新たな学びによって上書きしていくことが可能であり、正しい知識を社会で学べるよう機会を作っていくことが大人の責任である。

会場の様子

データや資料がふんだんに用いられた講義で、多くの学びを得ることができました。

講座で紹介されたオススメ動画

※QRコードを読み取ってご覧ください。

男の限界

男の子同士が取っ組み合いのケンカをしていても「男はいつまでも少年だから仕方ないんだ。」と何もしない大人たちの光景など、日常生活でも見たことがあるような瞬間が切り取られています。しかし、これが女の子ならばそうはならないはず。

男性だから許されていることが日常に多くあることや、セクハラや性暴力についても考えさせられる動画です。

行動する傍観者

日常に潜むセクハラ・性暴力の現場。性暴力の加害者の95％以上が男性、被害者の90％以上が女性という現状があり、女性は被害に遭いやすい立場にあります。

そんな場面を見かけた時、どうするのか。主人公がとる前半と後半の行動で結果が変わってきます。

周りの助けの重要性が伝わってくる動画です。

参加者アンケートより

現在、家庭科の教員になりたいと考えているが、実際に自分が受けてきた家庭科の授業で気になる発言があり、この講義でその発言の違和感がより強くなった。（10代 女性）

ジェンダーバイアスは幼いうちに植えつけられていて、大人の反応が大きく影響すると分かった。（20代 女性）

今まで女だから〇〇と周りに言われて育ち、大人になってからは無意識に言っていたなと気付かされました。今後は気を付けて発言、行動していきたい。（30代 女性）

息子がいるので、前から太田先生の本が気になっていました。もともと女性への差別について興味がありましたが、男の子の母親として男の子を育てる上で考えること、教えておくべきことなど知りたいと思っていたため、とても参考になりました。（40代 女性）

太田先生の著者は読んでいましたが、本の内容がより深く理解できました。また、自分も息子がいるのですが「悩み続けること自体が大事」「笑いに同調しない」という言葉はとても参考になりました。（40代 女性）

性差別解消のためには教育の果たす役割が大きいことに気付かせてもらった。自分の認識にも大きな変化をもたらせた。（50代 女性）

傍観者にならず、自分から行動できるように心がけたいと思った。（50代 女性）

女性管理職、あるいは賃金等の格差を始め、その原因となるものの解消に向け議論をする必要はもっとあると思った。（60代 女性）